

与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。3:11 というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。3:16 あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。3:17 もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。3:18 だれも自分を欺いてはいけません。もしあなたがたの中で、自分は今の世の知者だと思ふ者がいたら、知者になるためには愚かになりなさい。3:19 なぜなら、この世の知恵は、神の御前では愚かだからです。こう書いてあります。「神は、知者どもを彼らの悪賢さの中で捕える。」3:20 また、次のようにも書いてあります。「主は、知者の論議を無益だと知っておられる。」3:21 ですから、だれも人間を誇ってはいけません。すべては、あなたがたのもので、3:22 パウロであれ、アポロであれ、ケパであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてあなたがたのもので、3:23 そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のもので。

私たちが同額の建築資金と同じ広さの土地を与えられて、家を建てるとうまう。ただし、すべての家が完成して、公開されるまで、他の家を見ないとしましょう。おそらく、完成した家は軒一軒異なるはず。ある人は和風の家を建てるかもしれません。ある人は洋風の家を建てるかもしれません。ある人はキッチンや浴室などにお金をかけるかもしれません。ある人はインテリアにお金をかけるかもしれません。ある人は太陽光発電などにお金をかけるかもしれません。しかし、すべての家には一つの共通点があるはず。それは、建ぺい率、容積率、強度、耐火性などに関して政府が決めた建築基準に従っていなければならないことです。

では、神の神殿を建てる場合はどうでしょうか。神殿と言っても、今日の箇所「神殿」はエルサレムにあった神殿のことではありません。イエス・キリストを救い主と信じる信仰と信者の集まりです。パウロはしばしば、クリスチャンを「キリストのからだ」や「建物」に譬えました。今日の箇所では、「神の神殿」に譬えています。この箇所によると、クリスチャンは神殿を建てる建築家であると同時に、神殿の一部です。私たちはどのような基準に従って神殿を建てるべきでしょうか。どうしたら神殿の一部としてふさわしいでしょうか。パウロの助言を聞きましょう。

1. 神殿であるクリスチャンの土台

パウロは2回目の伝道旅行で、初めてギリシャのコリントを訪れました(使徒 15:40 ; 18:1)。もともと、2回目の伝道旅行の目的は、1回目の伝道旅行で信者になった人々の様子を見ることでした。その人々が住んでいたのは当時アジアと呼ばれた地域、現在のトルコでした。ヨーロッパに渡る計画は全くありませんでした。しかし、聖霊なる神がアジアでの伝道計画を中断させ、途中から加わったテモテヤルカと共に、パウロとシラスをヨーロッパに遣わしました(使徒 16:3, 6-10)。パウロがコリントを訪れたのは物見遊山ではありませんでした。主はコリントに信者になる人々が多くいることを分かっていたので、パウロたちを派遣しました。そして、「恐れないうで、(わたしについて) 語り続けなさい。黙ってはいけません。わたしがあなたとともにいるからだ。だれもあなたを襲って、害を加える者はいない。この町にはわたしの民がたくさんいるからだ。」と告げました。それで、パウロはコリントに1年半滞在して、神のことばを教え続けました(使徒 18:9-11)。

家を建てる時、強固な土台を据えないことは愚かです。どんなに建物が立派でも、土台が強固でないなら地震で倒れます。詳細は知りませんが、建物が大きければ大きいほど、高ければ高いほど、土台に求められる基準は厳しいはず。一軒家を建てる土台の上に高層ビルを建てることは認められないはず。高層ビルを建てるなら、地面を深く掘り下げ、液状化を防ぐ凝固剤を地面に入れ、コンクリート製の杭を何本も深く打ち込み、その上に鉄筋を幾重にも張り巡らしてからコンクリートを流し、強固な土台を造ります。最近、大地震の揺れを吸収する装置の付いた土台もめずらしくありません。

神の神殿(イエスを信じる信仰と信者の集まり)の土台も重要です。パウロはコリントに神の神殿を建てる際、賢い建築家として神の“建築基準”に従って、「イエス・キリスト」という土台を据えました。神が承認する唯一の土台を据えました。それ以外の土台を据えることは愚かでした。十字架に架る前の3年間の伝道活動の時、イエスもキリスト教会の土台について弟子たちに教えました。ある時、イエスは弟子たちに、「世間はわたしについて色々言っていますが、あなたたちはわたしを誰だと思っているのですか。」と質問しました。すると、ペテロが弟子たちを代表して、「あなたは生ける神の御子キリストです。」と答えました。イエスが子なる神であり、キリスト(旧約聖書で預言されている救い主)であることは、神によって示されなければ誰も分からないことでした。イエスはペテロの信仰告白を喜んで、「わたしはこの岩(ペテロが生ける神の御子キリストと告白したイエス)の上にわたしの教会を建てます。」と約束しました。イエスは強固な土台なので、地獄の力(ハデスの門)も勝てません(マタイ 16:13-18)。人間が造る建物はどんなに強固な土台の上に建てても、この世の終わり天変地異で跡形もなく滅び去りますが、イエスの上に建てられた神殿(信者)はびくともしないで残ります。

II. 神殿としてクリスチャンを建て上げる材料

パウロはコリントに神の神殿の土台を据えましたが、いつまでもコリントに留まっていることはできませんでした。伝道旅行の中の1年半はとても長いですが、神の神殿を建て上げるためには十分な時間ではありませんでした。パウロは建て上げる務めを他の人々に委ねました。私たちが家を建てる場合も、「土台が強固ならその上物は欠陥工事でよい。」ということにはなりません。欠陥工事をすれば、その結果は必ず現われます。今日の箇所には含まれていませんが、パウロは12節から15節で神殿を建てる時の材料の重要性についても触れています。日本では木造の家が多かったですが、結露や延焼を防ぐための人工建材を使った家も多くなりました。世界にはテントの家、わらや植物の葉でできた家、土やレンガの家、岩をくり貫いた家、大理石や金銀や宝石や高級家具がふんだんに使われた豪華な家があります。気候風土、好み、資金力によって人が用いる建築材料は異なります。

しかし、イエスという土台の上に金、銀、宝石、木、草、わらなどで神殿を建ててはいけません。パウロは「石や木や鉄や銅でなら建てても良い。」と言っているのではありません。「神の神殿を建てるためにふさわしい材料は神の純粋なことばだけです。それ以外の材料を使ってはいけません。」と強調しています。その理由は“三匹の子豚”の話に似ています。長男の豚はわらで家を造りましたが、狼がわらの家を吹き飛ばして、長男の豚を食べてしまいました。二男の豚は木の枝で家を造りましたが、狼が吹き飛ばして、二男の豚を食べてしまいました。三男の豚はレンガで頑丈な家を造ったので、狼は吹き飛ばすことができず、三男の豚は命が助かりました。

同じように、神殿（信仰と信者の集まり）が“純粋な神のことば”で建てられているか、そうでないかは、この世の終わりに明らかになります。その日はイエスが再びこの世に戻って来る日で、宇宙とその中に存在するすべてのものが火で焼き尽くされます（2ペテ 3:7, 12）。もし神殿が“純粋な神のことば”以外で建てられていたなら、この世の終わりの日に焼けてしまいます。“純粋な神のことば”で建てられていたなら、救われます。でも、神殿（信仰と信者の集まり）を“純粋な神のことば”以外で建てようとする人々などいるのでしょうか。それが、いるのです。例えば、福音書に登場する祭司、律法学者、パリサイ人たちは“先祖の言い伝え”によって神殿を築こうとしました（マルコ 7:1-13）。コリントの信者たちは、自分たちの好みの指導者によって神殿を築こうとしました（1コリント 1:11, 12）。テモテの時代には、系図や空想話や自分に都合の良い話をしてくれる牧師によって神殿を築こうとする人々がいました（1テモテ 1:4；IIテモテ 3:3）。私たちも、注意していないと、すぐに神のことばから離れ、この世的な考えに陥ってしまいます。エバが悪魔によって簡単に誘惑されたことを忘れないようにしましょう。もし、私たちが神の神殿（本当の信者の集まり）にふさわしい部分でありたいなら、律法が指摘する罪を認め、悲しみ、イエスが福音を通して差し伸べる赦免のことばで慰められ、平安と永遠の命の希望を与えられ続けることが必要です。ですから、神のことばを正しく教える牧師は神から信者への贈り物です。それを選び好みすることは、神からの賜物を拒絶することです（1コリント 1:12）。

III. 神殿は聖霊が宿るところ

イエス・キリストという土台の上に、純粋な神のことば（律法と福音）によって建てられたクリスチャンは神の神殿で、神の御霊（聖霊）が宿るところです。神殿は聖なる場所です。神殿を汚さないようにしましょう。神殿を壊さないようにしましょう。もし神殿を汚したり、壊したりするなら、神がその人を滅ぼします。そうならないために、私たちは自分を欺かないようにしましょう。律法が指摘するように、私たち人間は神の御前では愚かで惨めな罪人であることを認めましょう。人に対しては誇れることも、神に対しては誇れないことを認めましょう。社会的に良い評価を得ても、自分で自分の罪を償う力も功績もないことを認めましょう。そうすることは私たちにとって祝福となります。「あなたには救い主が必要です。」という知恵を神のことばから得るからです。もし私たちが自分の知恵に頼るなら、その知恵が私たちを神から引き離す罠になります。「人生は一度だから、自分の好きな生き方をしなければ損だ。」と思うなら、その知恵が私たちを神から引き離す罠になります。「私には神の御前で誇れることがある。」と思うなら、その知恵が私たちを神から引き離す罠になります。

自分でしかけた罠にかかることは愚かですが、神はその方法を用いて不信者を捕えます。人が神以上に何かを愛したり、頼る時、それはその人を捕える罠になります。人が「知恵だ」と思っていることを、聖書はその人の「悪賢さ」と呼んでいます。神は不信者をその人の悪賢さの中で捕えます。その罠に陥らないために、神の御前では愚かでありましょう。自分の罪深さや弱さを認めましょう。そして、神のことばによって救われるための知恵を与え続けていただきましょう。そうすれば、私たちの心はきよめられ、聖霊が住むのにふさわしい場所となります。私たちにも罪深い性質が残っているので、継続的に神のことばを読み、聞き、学び、聖餐式を受けましょう。そうすれば、福音を通して聖霊が与えられます。聖霊は私たちの思いやことばや行ないをきよめます。聖霊はイエスが唯一の救い主であることを私たちに教え、イエスを信じる私たちの信仰を生きた信仰にします。イエスを愛して、イエスに感謝して、イエスの教えに喜んで従うように私たちの信仰を強めます。私たちの心をイエスへの賛美で溢れさせます。ですから、自分の知恵ではなく、これからも聖書が教える知恵に導かれて歩みましょう。私たちの生まれながらの目にはそう見えませんが、信仰によって神に属する者には、過去のものも、現在のものも、未来のものも、すべて与えられています。なぜなら、神がすべてを支配しているからです。